

IV-2-5 沖縄

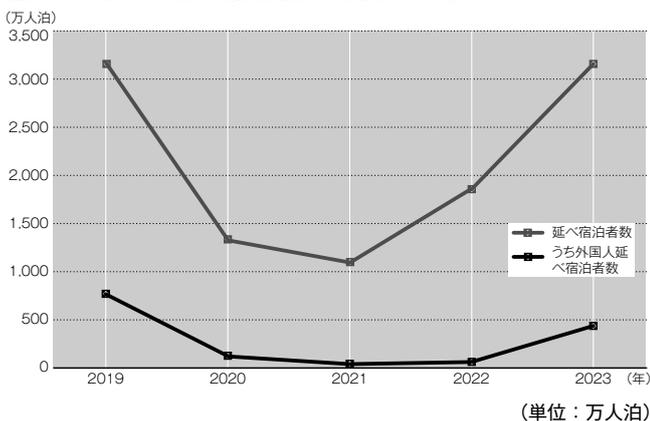
2023年の入域観光客数は823.5万人
外国人客の占める割合は前年の15倍だが回復途上
観光消費額は初めて10万円台を超える(2022年)

(1) 都道府県レベルの旅行者動向

観光庁「宿泊旅行統計調査」によると、2023年1月から12月までの沖縄県の延べ宿泊者数は3,288万人泊であった。前年比80.3%増であり、コロナ禍直前の2019年実績を上回った。

このうち、外国人延べ宿泊者数は448万人泊であった。前年比668.2%増と急激な増加であるが、2019年比では57.8%と約6割の回復にとどまった(図IV-2-5-1)。

図IV-2-5-1 延べ宿泊者数の推移(沖縄)



	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年
延べ宿泊者数	3,287	1,379	1,147	1,823	3,288
うち外国人延べ宿泊者数	775	107	24	58	448

資料:観光庁「宿泊旅行統計調査」をもとに(公財)日本交通公社作成

沖縄県の推計による2022年の観光客一人当たり観光消費額(総額)は約10万5千円であり、前年を約1万円上回るとともに、調査開始から初めて10万円の大台を超えた。2017年以降、一人当たり観光消費額は7万3千円程度で推移していたが、2020年から増加トレンドが維持されている。コロナ禍からの明確な旅行需要の回復傾向は、前述した延べ宿泊者数や後述する入域観光客数の指標に表れているものの、10万円の大台を超えるに至った背景としては、海外旅行の回復が遅れ、歴史的円安傾向となる中で海外旅行先の代替地として沖縄が選択されることで観光消費額を押し上げたことが推察される(図IV-2-5-2左軸)。

2023年の入域観光客数(含ビジネス客)は、823万5千人であった。前年比44.5%増であり、2019年実績の約8割の値となりコロナ禍からの回復が鮮明となりつつある(図IV-2-5-2右軸)。

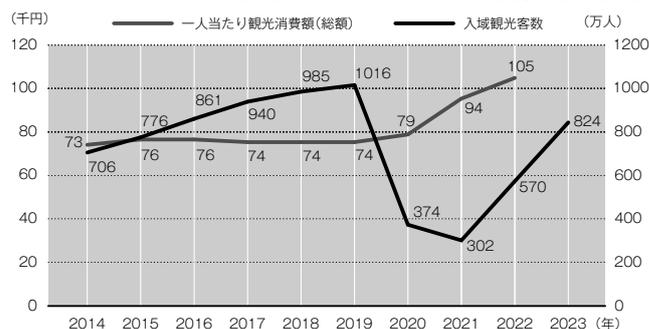
2023年の入域観光客数のうち、国内客数は724万9千人、外国人客数は98万7千人、外国人客の占める割合は12.0%と、前年の0.8%の15倍となる大幅な増加であった。国内客数は前

年比28.3%増となり、723万4千人であった2019年実績を上回った。一方で外国人客数は前年から増加が見られたものの、値は2019年実績の約3分の1にとどまり、コロナ禍の影響が続いていることがうかがえる(図IV-2-5-3)。

離島の動向を見ると、沖縄県八重山事務所が公表する2023年の八重山地域の入域観光客数は119万7千人であった。前年比30.4%増であり、2019年実績の約8割の値となった。また、宮古島市が公表する2023年の宮古島の入域観光客数は88万4千人であった。前年比33.5%増であり、八重山同様2019年実績の約8割の値となり、八重山地域、宮古島市ともにコロナ禍からの着実な回復が見られる(図IV-2-5-4)。

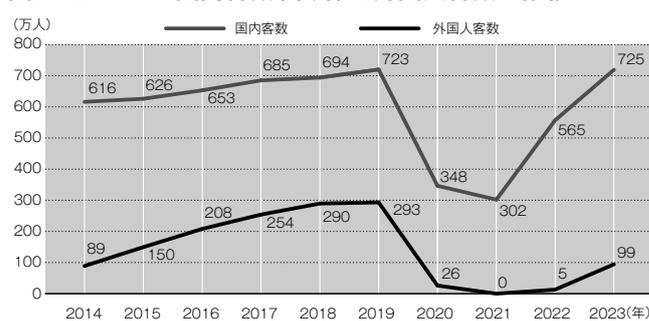
沖縄県全体の入域観光客数の推移と比較すると、2019年度実績から県全体と同様に8割程度まで回復しており、離島においても旅行需要回復は堅調なものになりつつある。

図IV-2-5-2 入域観光客数と一人当たり観光消費額の推移



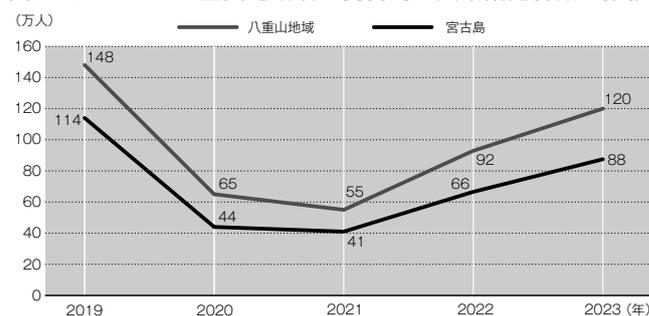
資料:沖縄県「観光統計実態調査」をもとに(公財)日本交通公社作成

図IV-2-5-3 国内客数(県外)と外国人客数の推移



資料:沖縄県「入域観光客統計概況」をもとに(公財)日本交通公社作成

図IV-2-5-4 八重山地域及び宮古島の入域観光客数の推移



資料:沖縄県「八重山入域観光客数統計概況」及び宮古島市「宮古島市の入域観光客数」をもとに(公財)日本交通公社作成

(2) 観光地の主な動向

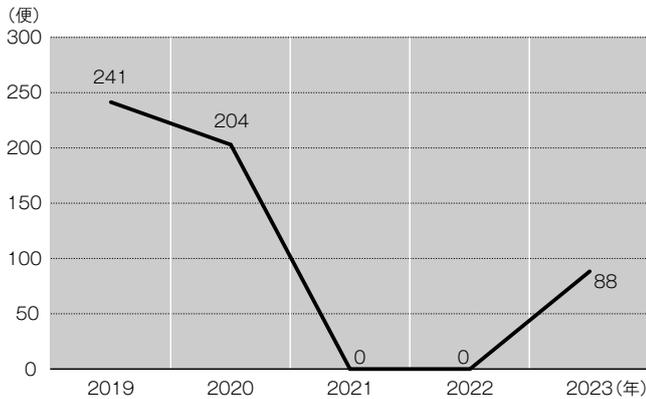
●国際線の状況

2019年以降の週当たり便数の推移を、図IV-2-5-5に示す。2022年は、2020年、2021年と2年にわたって運休されていた国際線の再開が相次いだ。

2022年3月、観光以外を目的とする外国人の新規入国が再開された。以降、一日当たりの入国者数上限の段階的な引き上げ等の措置と並行して、同年6月には条件付きで外国人観光客の受け入れが再開され、10月には個人旅行の解禁を含む大幅な緩和がなされた。これらの措置に伴って、県内空港に発着する国際線の運行再開が進展した。

那覇空港については、2020年6月に外国人の受け入れに係る検疫体制の基準を満たす国際線の発着空港として指定された。2023年1月末日時点で台北、ソウル、香港への直行便が再開されているが、88便と、2019年実績である241便には大きく及ばない状況が続いている。

図IV-2-5-5 那覇空港、新石垣空港、下地島空港における国際線(直行便)の週当たり便数の推移



※2019年は6月1日時点の便数、2020年以降は1月末日時点の便数
資料：沖縄県「観光要覧」をもとに(公財)日本交通公社作成

●宿泊施設の開業

2023年から2024年前半にかけてオープンした、沖縄県内の主な宿泊施設(名称変更等によるリニューアルオープンを含む)を、表IV-2-5-1に示す。この期間を通じて沖縄本島、離島地域それぞれで複数の宿泊施設が開業し、2022年に引き続き、各地域における施設数及び収容人数の継続的な増加が見られた一方で、コロナ禍以前に計画された宿泊施設の開業が一段落し、2019年から続いていた開業ラッシュにはやや落ち着きが見られる。

那覇市では2023年中に、「Southwest Grand Hotel」(2023年6月)、「ダイワロイネットホテル那覇おもろまちPREMIER」(同10月)等の開業が見られた。また、1975年の開業以来、48年にわたり、那覇の中心地である国際通りに面した立地を活かし、宿泊のみならず、和洋中のレストラン、宴会場を有するシティホテルとして利用されてきた「ホテルロイヤルオリオン」が2023年3月から全館休業し、2023年11月に「オリオンホテル那覇」と名称を変更しリニューアルオープンした。

恩納村では、1975年7月にリゾートホテルとして開業し、三日月形の天然のビーチを抱くように建ち、沖縄の風土に適した豊かで大らかな空間と、ガジュマルの木陰を思わせる約

3,000坪のピロティを有する、特徴的な建築様式のホテル「ホテルムーンビーチ」が、2023年4月、建物の中のギャラリーをはじめ館内各所にアート作品がちりばめられ、特徴的な建物と豊かな自然とアートが融合した「ミュージアムホテル」[ザ・ムーンビーチ ミュージアムリゾート]へとリブランドオープンした。その他「Homm Stay Yumiha Okinawa」(2023年8月)等、室数規模の異なる複数の施設の開業が見られた。

沖縄本島のその他市町村においては、名護市では「New Normal Hotel in NAGO」(2023年3月)、「TWIN-LINE HOTEL YANBARU OKINAWA JAPAN」(同8月)、うるま市では、「タップホスピタリティラボ 沖縄」(同6月)、沖縄市では、「レフ沖縄アリーナ by ベッセルホテルズ」(同8月)、豊見城市では、「STORYLINE 瀬長島」(2024年4月)、読谷村では、「グランドメルキュール沖縄残波岬リゾート」(同4月)が、それぞれ開業した。このうち、名護市の「TWIN-LINE HOTEL YANBARU OKINAWA JAPAN」及び読谷村の「グランドメルキュール沖縄残波岬リゾート」はともにリニューアルである。沖縄市の「レフ沖縄アリーナ by ベッセルホテルズ」は、『“輝き放つ沖縄市”を共に創造する』をコンセプトとし、男子プロバスケットボール・Bリーグの琉球ゴールデンキングスの本拠地でもある沖縄アリーナ近くには大型宿泊施設が乏しいという課題に対応した大型宿泊施設であり、「琉球ゴールデンキングスルーム」等の特色ある客室を備えている。

離島地域においては、宮古島市で「グランテックリゾートヘブン」(2023年3月)、「ヒルトン沖縄宮古島リゾート」(同8月)、「ホテルシギラミラージュビーチフロント」(2024年2月)が開業し、中でも「ヒルトン沖縄宮古島リゾート」は全329室の

表IV-2-5-1 2023年から2024年前半にかけて開業した主な宿泊施設

	開業月	宿泊施設名	所在地	室数
2023年	2月	リゾートイン西表島	竹富町	20室
	3月	New Normal Hotel in NAGO	名護市	28室
	3月	グランテックリゾートヘブン	宮古島市	30室
	4月	ザ・ムーンビーチ ミュージアムリゾート(旧ホテルムーンビーチ)	恩納村	255室
	6月	Southwest Grand Hotel	那覇市	88室
	6月	タップホスピタリティラボ 沖縄	うるま市	38室
	7月	ホテルグランビュー石垣 The First	石垣市	98室
	8月	Homm Stay Yumiha Okinawa	恩納村	18室
	8月	ヒルトン沖縄宮古島リゾート	宮古島市	329室
	8月	TWIN-LINE HOTEL YANBARU OKINAWA JAPAN(旧沖縄サンコーストホテル)	名護市	92室
	8月	レフ沖縄アリーナ by ベッセルホテルズ	沖縄市	150室
2024年	10月	ダイワロイネットホテル那覇おもろまちPREMIER	那覇市	160室
	11月	オリオンホテル那覇(旧ホテルロイヤルオリオン)	那覇市	205室
	2月	ホテルシギラミラージュビーチフロント	宮古島市	93室
	3月	VIVOVIVA石垣島	石垣市	98室
	4月	STORYLINE 瀬長島	豊見城市	101室
4月	グランドメルキュール沖縄残波岬リゾート(旧ロイヤルホテル沖縄残波岬)	読谷村	465室	

資料：新聞記事、ウェブサイト等の公開情報をもとに(公財)日本交通公社作成

大型施設であり、市全体としての提供室数は大きく増加した。そのほか、竹富町では「リゾートイン西表島」(2023年2月)、石垣市では、「ホテルグランビュウ石垣 The First」(同7月)、「VIVOVIVA 石垣島」(2024年3月)が開業した。

●観光関連施設の開業

2023年から2024年前半にかけてオープンした、沖縄県内の主な観光関連施設(商業施設、アミューズメント施設等)を、表IV-2-5-2に示す。

2024年前半までに開業した施設を掲載しているため、同表には掲載されていないが、2023年11月には、沖縄本島北部に2025年の開業を予定するテーマパークの名称が「JUNGLIA」(ジャングリア)であることも発表された。本テーマパーク事業を推進する刀(大阪府大阪市)によると、「Power Vacance!!」(パワー バカンス)をコンセプトに、やんばるの自然のエネルギーを体感し、最先端技術を活用した質の高いエンターテインメントで興奮と解放感を得られる空間を目指すとのことである。北部の一大観光拠点となる本施設が開業することで、県内の人流に大きな変化が生まれることが見込まれる。

●FIBAバスケットボールワールドカップの開催

2023年8月25日から10日間にわたり、沖縄市の「沖縄アリーナ」で、FIBAバスケットボールワールドカップの1次ラウンド等が開催され、県内外から延べ12万5千人余りの観客が訪れた。沖縄で初となるトッププレイヤーが集う大規模国際スポーツ大会であり、県の試算によると経済効果はおよそ107億円に上った。

また、「沖縄アリーナ」を本拠地とする琉球ゴールデンキングスは2023年5月に初のリーグ優勝を飾る等、バスケットの熱い一年となった。琉球ゴールデンキングスは、2022-23シーズンは「沖縄アリーナ」での試合に平均約7千人のファンが詰めか

け、Bリーグ史上初のシーズン入場者20万人を達成する等、Bリーグにおける人気球団となりつつある。県内のバスケットボール人気の高まりもあり、2023年12月には「沖縄アリーナ」の来場者も100万人を突破した。

沖縄にとってスポーツツーリズムは、夏の繁忙期に集中していた需要を平準化し、経済や雇用を安定させるための重要な施策であり、今回のワールドカップの開催は受け入れ体制整備等が結実したものといえる。また、その他のスポーツとしては、プロ野球の春季キャンプ(2月)は冬の沖縄の風物詩となっている等、スポーツツーリズムの充実に向けて官民挙げて取り組みを進めている。

●県内宿泊施設の軒数・収容人数・定員稼働率の推移

本土復帰した1972年から2022年までの沖縄県内の宿泊施設(ホテル・旅館)の軒数の推移を図IV-2-5-6に、収容人数の推移を図IV-2-5-7に、それぞれ示す。宿泊施設の軒数及び収容人数は、施設規模の大小を問わず継続的に増加している。コロナ禍による大きな影響が生じた2020年から2022年にかけてもこの傾向は同様であり、宿泊旅行の基盤となる施設の数や収容人数の減少は認められなかった。

沖縄県内の宿泊施設タイプ別の定員稼働率について、2023年及び2019年における各月の値、ならびに2023年各月の値の前年同月からの増減を、図IV-2-5-8に示す。2023年9月までは前年を上回る月が続いたものの、それ以降は前年を下回る月が見られるようになり、コロナ禍からの回復には停滞も感じられるようになった。ホテルの開業ラッシュはやや落ち着いたものの、このまま宿泊施設の増加が続けば、人材の流動化等によるサービスの低下が懸念されるため、今後は、県が「第6次沖縄県観光振興基本計画」で示すように、「量から質」への観光の転換が求められる。

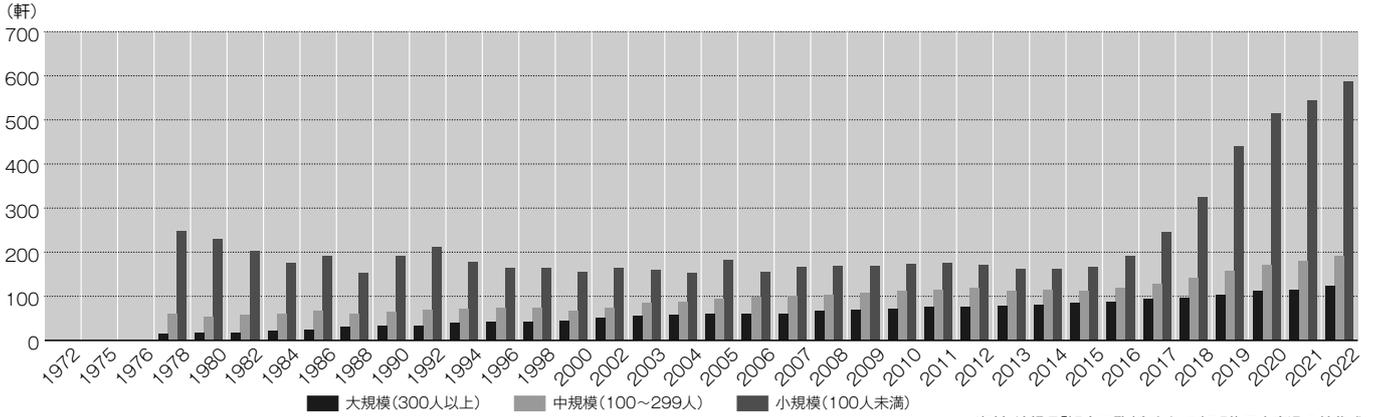
(原口達樹／中島 泰)

表IV-2-5-2 2023年から2024年前半にかけて開業した主な観光関連施設

年 月	施設名	所在地	概要
2023年	11月 ニトリ	石垣市	全国都道府県の離島に新規出店するのは石垣店が初めて。店舗面積は約2,466㎡。商品を石垣島まで運ぶ輸送コストがかかるため、消費者は購入商品の合計代金(税込)に「離島手数料」として、購入額の10%を加算して支払いを行う。竹富町の各島等に配達する際は、別途で送料も発生する。
	12月 チームラボ 学ぶ! 未来の遊園地 沖縄	那覇市	「T ギャラリーア 沖縄 by DFS」にオープンした体験型アート施設。アート集団「チームラボ」が監修し、共同的な創造性、共創(きょうそう)をコンセプトにした教育的なプロジェクトとして、他者とともに自由に世界を創造することを楽しむ「遊園地」となっている。
2024年	3月 ちきゅうのいわ イオンモール沖縄ライカム店	北中城村	遊びながら地球の面白さや自然の大切さを学べる0歳から12歳までの子どもを対象とした大型屋内プレイグラウンド。「火山」、「海と風」、「森」等、自然をモチーフにした各エリアでは、遊具やテラスワークショップ等、屋内にありながら自然とふれあうように遊ぶことができる。
	4月 Little Universe OKINAWA (旧 SMALL WORLDS OKINAWA)	豊見城市	大型商業施設「イースス沖縄豊崎」内にオープンした、デジタル空間演出×ミニチュア×AR等の最新テクノロジーが融合した新感覚ハイブリッドエンターテインメント施設。総面積約3,300㎡・テニスコート13面分の広さに、18世紀の琉球王朝や1980年代の東京等、複数のミニチュアを展示。
	4月 みやこ下地島空港 ビジネスジェットターミナル	宮古島市	プライベートジェットやビジネスジェットで下地島空港を利用する人とその乗務員をターゲットとし、天井の内装に温もりのある木材を使ったラウンジ、仮眠室やシャワー室等もあり非日常である島の温かさを感じられる空間となっている。
	5月 なごアグリパーク(リニューアル)	名護市	コンセプトは食のはぐくみと、ものづくりへのこだわりを意味する「FARM&CRAFT (ファーム&クラフト)」であり、沖縄の豊かな自然の恵みを感じることができるグルメや土産、体験があふれ出す、食のテーマパークとしてリニューアル。

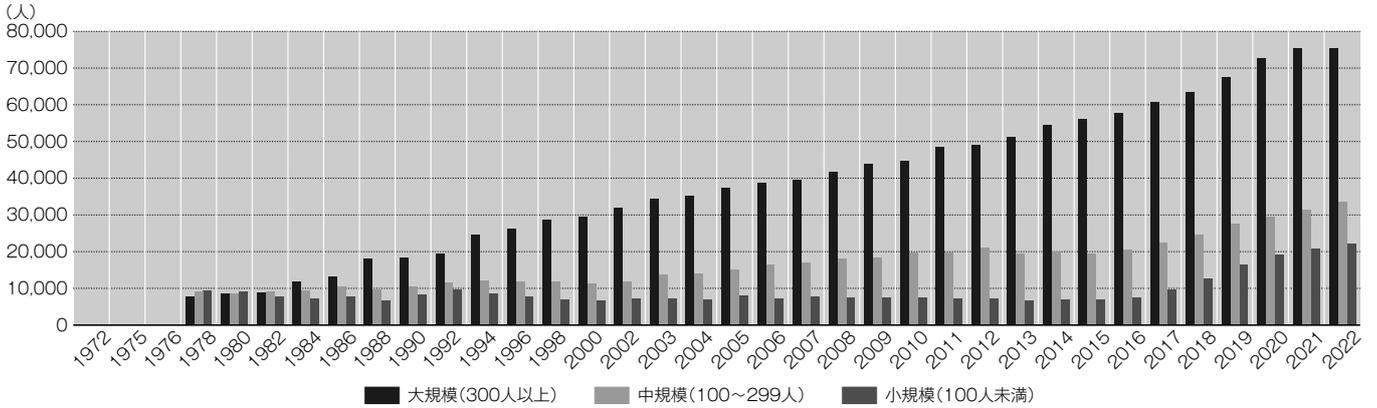
資料:新聞記事、ウェブサイト等の公開情報をもとに(公財)日本交通公社作成

図IV-2-5-6 沖縄県内のホテル・旅館の軒数推移



資料：沖縄県「観光要覧」をもとに（公財）日本交通公社作成

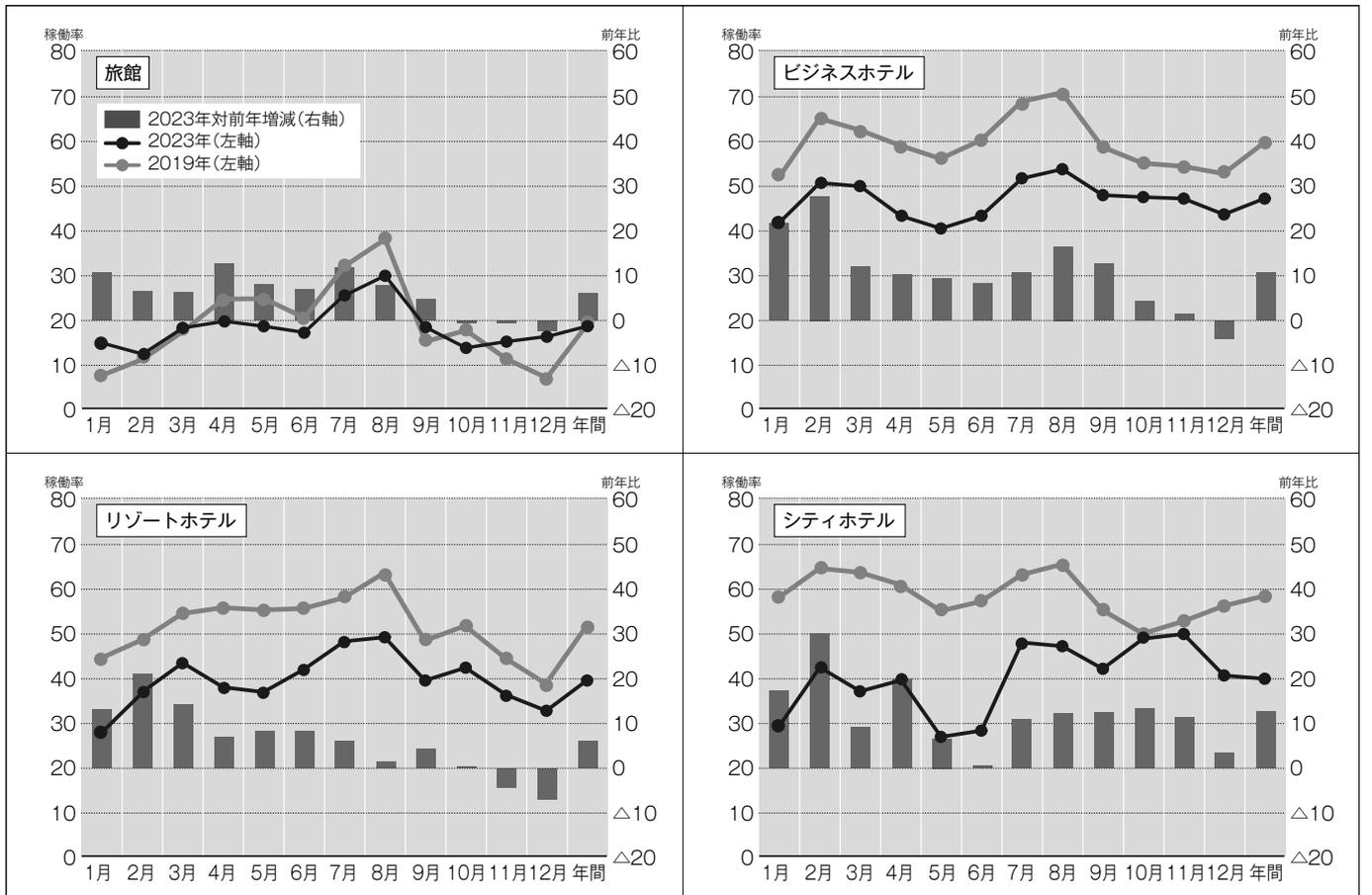
図IV-2-5-7 沖縄県内のホテル・旅館の収容人数推移



資料：沖縄県「観光要覧」をもとに（公財）日本交通公社作成

図IV-2-5-8 沖縄県内の宿泊施設タイプ別一月別定員稼働率(2019年、2023年、2023年対前年増減)

(単位：%)



資料：観光庁「宿泊旅行統計調査」をもとに（公財）日本交通公社作成